

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2011～2015

課題番号：23401023

研究課題名(和文)中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティの言語維持保存や継承復興への取り組み

研究課題名(英文)Activities for Preservation, Protection, Inheritance and Revitalization of the Language of Mongolian Communities in Heilongjiang Province China

研究代表者

包 聯群 (BAO, Lianqun)

大分大学・経済学部・准教授

研究者番号：40455861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本課題は、中国黒龍江省におけるモンゴル人コミュニティの言語を記録・保存し、言語接触や言語変異の実態を明らかにした。また、泰来県の重点高校(泰来一中)に「モンゴル語」を学ぶクラスを設置し、モンゴル語を継続的に学ぶ環境が整備されたことにより、大学へ合格した者も多数いる。また、泰来モンゴル人連合協会(「蒙古族联谊会」)が設置され、「言語文化」の継承に関する催しが毎年開催されるようになった。上記の様々な活動の結果、コミュニティの言語維持や言語保護ができた。さらに言語維持や言語継承の理論的枠組の構築に貢献できた。

研究成果の概要(英文)：This Project has recorded and preserved the language of Mongolian communities in Heilongjiang Province China, and clarified the situation of their language contact and language change. It also set up a Mongolian learning class in the chief middle school of Tailai County (Tailai First Middle School), and enabled it to have an environment in which Mongolian language learning can continue. Due to this, many people have been able to enter Universities. The community also established a Mongolian social club and carry out related activities to inherit Mongolian language and culture. Through various activities mentioned above, it became possible for the communities to preserve and protect the language. Furthermore, we also have set up a theoretical framework for making language preservation and language inheritance possible. This also have made a contribution to this field of study.

研究分野：言語学、社会言語学

 キーワード：モンゴル語 コミュニティー言語 継承言語 言語維持 言語保護 言語継承・言語復興 言語政策
 少数言語

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は「中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティの言語維持・保存や継承・復興への取り組み」をテーマとし、主に黒龍江省におけるモンゴル人を研究の対象とした。黒龍江省におけるモンゴル人は漢民族との接触が日常的であり、その言語も中国語の影響を圧倒的に受けている状況に置かれている。中国語との接触によって様々な言語変異現象が発生し、100年前に比べるとモンゴル人の日常言語は大きく変容し、モンゴル国の話者と互いにコミュニケーションを取りにくい状態までに変貌している。しかし、中国国内の言語学者はその変化について根本的な研究を行っておらず、少数民族の言語維持や言語保護への取り組みも実施していない。

(2) 黒龍江省のモンゴル人コミュニティ言語については、80年代初頭から研究が存在している(吉特 1983、Uyundalai 1990、張亜光、波・少布 1990、Uyundalai 1988、何日莫奇 1997)。一方、漢民族と接触があるモンゴル人が居住する他の地域においても類似する言語現象が起きているとの報告がある(Engke 1990, Dambarabjai 1990, Agula, Xasčimeg 2001)。しかし、上記の研究のいずれも現地調査が行われておらず、言語理論の不足および研究方法等の不備といった問題があった。

(3) 社会言語学の言語接触に関する分野ではヨーロッパのデータが多数を占め、アジアのデータが少ない中、報告者は博士論文で中国黒龍江省におけるドルブットモンゴル人コミュニティ言語(DMCL)を研究の対象にし、DMCLの音韻的・形態的・統語的な特徴を明らかにすることを目指した。そこでDMCLの変化を促進した要素、即ち背景たる教育的・社会的諸要因も視野に入れて考察した。DMCLは社会言語学者の Bakker and Muysken (1994)、Bakker and Mous (1994)等

が提唱する混合言語(Mixed Language)と共通点があり、その形成プロセスを解明したことにより、社会言語学理論の構築に役に立つデータを提供することができた。さらに、非モンゴル族自治地域のモンゴル人コミュニティ言語の実態を解明した。

(4) 黒龍江省のモンゴル語教育を実行する責任者とともにハルビン市近郊及び泰来県で予備調査を行い、住民らがモンゴル語授業の回復を黒龍江省民族委員会に訴えていた事実を把握した。その内容は、モンゴル語教育の回復とモンゴル族中学校ではモンゴル語の授業はあるが、高校では授業がない。そのため、モンゴル語の習得を中断せざるを得ないということであった。したがって、モンゴル語教育の継続的実現のため、官民研究者が一体となり、モンゴル語の教授が実行できる環境を整備し、危機言語の継承に取り組む必要があった。

2. 研究の目的

本研究は、中国黒龍江省におけるモンゴル人コミュニティ言語を記録・保存し、言語継承や言語復興へ取り組むことが目的である。言語を記録・保存した後、多くの高校が科目にモンゴル語を取り入れるよう行政に訴え、実行に移してもらう。そして、モンゴル語の授業に参加し、その習得状況や影響の追跡調査を行うことによって、危機言語の習得メカニズムを明らかにする。今まで中国国内でほとんど行われてこなかった少数言語復興の事例を提供でき、日本を含むアジア地域における言語維持や言語継承などに関するデータの不足を補い、共同使用可能なデータを構築し、当分野での理論構築に貢献することが目的である。

3. 研究の方法

本研究は、まず語彙リストや文法事項インタビュー調査票などの資料を作成した後、現地調査で話者同士による自然談話、物語の録

音・録画を行った。調査票の作成にあたり、『アジア・アフリカ 言語調査票(下)』(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編 1967年)、『中国新発見言語研究シリーズ 浪速語研究』(戴慶夏、2005年)などを参考にした。また、研究実施に当たっては、崎山理・遠藤史(Eds.2000,環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究)、真田信治(Eds.2001,環太平洋の「消滅に瀕した言語」に関する緊急調査研究)、パトリック・ハインリッヒ、杉田優子(2009)、Matras and Bakker(Eds. 2003)、Fishman(1966、1991、2000)などの資料や文献を参考にした。

本研究は、幅広い研究領域に寄与できるようにするため、多様な場面でのデータ、特に自然コミュニケーションのデータ、映像や音声などを含めて記録保存した。また、実際の記録保存作業において、人々の言語行動及びそれに関連する知識などを含め、メタコミュニケーション情報も記録し、現地での活動を通して、当地域のコミュニティと共同で言語維持や言語継承の環境育成に尽力し、言語の復興に努めた。

4. 研究成果

(1) 黒龍江省泰来県、肇源県、富裕県、大慶市ドルブットモンゴル族自治県、チチハル、ハルビン、綏化県平和牧場五家子村などの地域におけるモンゴル語、モンゴル人コミュニティ言語及びモンゴル語教育事情などについて、詳細な調査を行い、それらを記録し、録音・録画をした。データを分析することにより、システムとして(学校教育)の言語と実践として(コミュニティ)の言語の違いが明らかになり、言語変異の実態を解明した。(2) モンゴル語を教えている黒龍江省のすべての地域を対象にし、モンゴル語の教育実態の調査、習得状況の確認を行い、モンゴル語の習得プロセスをある程度まで把握した結

果、学校教育によって習得するモンゴル語が日常言語の使用にある程度影響を与えていることがわかった。

(3) 黒龍江省泰来県を中心にし、地元政府の関係者、黒龍江省のモンゴル語教育の責任者とともに、コミュニティ言語の使用者を対象にモンゴル語教育に関して聞き取り調査を実施し、特に泰来県モンゴル族学校におけるモンゴル語教育の促進と維持、継続(高校に進学しても継続できる環境の構築)と改善に力を入れた。その結果、泰来県重点高校(泰来一中)に「モンゴル語」を学ぶクラスの設置に成功し、モンゴル語を継続的に勉強できるようになり、大学に進学できる生徒も毎年増えている。

(4) 黒龍江省のモンゴル語教育に関する情報、メタコミュニケーション情報を含む関連知識や行動の情報を収集できた。また、現地のコミュニティと連携を保ち、様々な活動によって、コミュニティの言語維持や言語保護を可能にした。当研究によって、少数民族の話者らが言語維持や言語保護の大切さを改めて認識でき、泰来モンゴル人連合協会(「蒙古族聯誼会」)が設置され、「言語・文化」の継承などに関する催しが毎年開催されるようになった。

(5) 危機言語を継承していくには、理論的に以下のような要素と条件を備えるべきであることが判明した。即ち、当事例を通して言語維持や言語保護を可能にするには、少なくとも以下の要素が必要不可欠であることが明らかになった。

- a. コミュニティー
- b. 個人(個人活動家)
- c. 政府機関
- d. 研究者(地元研究者、外部からの研究者)
- e. 動機付け
 - ・ 進学(中学校・高校・大学など)
 - ・ 就職(将来の就職に有利のため)
 - ・ 以上の目的のための準備段階

f. 経済的要因

g. 民族アイデンティティ

危機言語を継承していくには、一定の動機付けが大変重要であることがわかった。当事例の場合、大学の進学先が内モンゴル、あるいは進学時にモンゴル語の語学点数を総合点数にプラスにする制度があることや就職時にモンゴル語を知っていることで優位に立つことがあるとモンゴル語を学ぶ人が増え、危機言語の継承に繋がる。このように直接生活に結びつくメリットがあることが非常に重要である。そのため、地元行政からのサポートもある程度必要である。また、この研究により、継承言語という概念を中国国内に発信することができた。

(6) 国際学会に参加し、研究報告を行い、研究者らとの意見交換をすることができた。2012年から2016年3月にわたって、日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語について考える」が5回開催された。当ワークショップに六ヶ国（中国、モンゴル国、ブリヤート共和国、イギリス、カナダ、日本）からの研究者らが参加し、論文を発表したことで、様々な議論や意見が交わされた。当ワークショップの成果を、『現代中国における言語政策と言語継承』（第1、2巻、第3巻予定）として刊行した。また、国際ワークショップの開催によって当地域に関する活動報告を日本から世界へ発信することができた。

(7) 2016年3月25日に当地域を再度訪問し、コミュニティーの人と話し合いをして、言語の維持・継承について長期目標を定めた。言語継承活動の継続が今後もできるよう、コミュニティー・地元政府・研究者らがともにサポートしていくことについての確認をした。

(8) 本研究は日本を含む危機言語の保存や復興運動の一環として、言語維持や言語保護への取り組みを実施する過程では、以上のようなプロセスを辿ってきた。本研究の成果は

同様な社会環境や政治背景下に置かれている他地域の少数言語の研究にも参考になる。このような取り組みを通じて、中国へ継承言語概念を初めて発信することができ、中国国内の研究者の言語維持や言語継承などへの関心を生起せしめることができた。その結果として、黒龍江省ドルブットモンゴル語が2016年に中国教育部と「中国語言資源保護研究中心」が実施している「中国語言資源保護」プロジェクトに採用され、調査を行う予定。(9) 以上のような研究・活動成果は中国の他の地域の少数民族言語の継承や維持のみではなく、日本を含むアジア地域における少数言語の保存や復興に繋がり、当分野の理論形成に役立つ事例を提供できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計13件)

- (1) 黄行・包聯群、Identification and Practical Situation of Endangered Languages in China, 『言語復興の未来と価値 理論的考察と事例研究』(学習院大学東洋文化研究所)、184-193頁、2016、査読無、三元社(印刷中)。
- (2) 井上史雄・包聯群、「内蒙古文字景観の社会言語学-文字の社会類型論-」、『社会言語学』2015、25-45頁、査読有。
- (3) 包聯群、「日本の社会言語学の誕生、発展と現状について」(中国語)、『中国語言戦略』(No2、徐大明、王鉄琨主編) 南京大学出版社。2015、176 - 192頁、査読有。
- (4) 包聯群、「中国黒龍江省チチハル市におけるダグル語の実態」、『経済論集』(大分大学)、査読有、第67巻(第1・2・3合併号)、61-82頁、大分大学経済学会。2015年9月、査読有。
- (5) 包聯群、「「双語/バイリンガル教育」の真偽」、『内モンゴルを知るための60章』(ブレンサイン編著)。90-94頁、2015、査読無、明石書店。
- (6) 包聯群、「経済言語学の視点からみる言語景観—アメリカのチャイナタウンと日本の中華街の比較」、『経済論集』大分大学(第66

巻 第 5 号) 85-116 頁、査読有。大分大学経済学会。2015 年 1 月。

(7)原聖・パトリック・ハインリヒ、“Linguistic and cultural revitalization”, in: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.), Handbook of the Ryukuan Languages, Berlin/Boston/Munich, Walter de Gruyter, 2015, pp. 649-665.査読有。

(8)包聯群、「コミュニケーションの中で新たに作られた言語—モンゴル語と中国語の接触を事例として」、『第 2 回アジア未来会議論文集』(AFC2014, USB メモリ電子データ 373、A4: 8 枚) 査読有。

(9)包聯群、「モンゴル人コミュニティー言語維持、言語継承と言語復興」、包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第 1 巻、査読無、2013 年 8 月、47-94 頁。三元社。

(10)包聯群、「民族言語におけるバイリンガル動詞 北方少数民族コミュニティー言語における蒙漢と満漢バイリンガル動詞を事例として—について—」(中国語)、『民族語文』(No.202) 査読有、2013 年 9 月、中国社会科学院。75-81 頁。

(11)包聯群、「日本の言語計画」(中国語)、『中国語言戦略』創刊号 (No1、徐大明、王鉄琨主編) 査読有、2012 年、188-198 頁。上海译文出版社。

(12)徐大明・包聯群、「言語の多様性と言語計画」、『言語政策史の国際比較に関する総合的研究』(基盤研究 B、研究成果報告書 研究代表者 原聖)28 - 34 頁、査読無。2012 年。

(13)原聖、「少数言語と危機言語」、『世界民族百科事典』。丸善出版、2014 年、172-173 頁。

〔学会発表〕(計 17 件)

(1)包聯群、「科研基盤 B プロジェクトの概要と成果報告」、『第五回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語について考える」』にて、科研基盤 B (代表者 包聯群) 主催、東京大学東洋文化研究所研究班 (代表者 名和克郎) 共催。東

京大学東洋文化研究所(東京都文京区) 2015 年 11 月 28 日。

(2)包聯群、「北方少数民族語ダグル語への中国語の影響 - 中国黒龍江省チチハル市を事例に—」、『第 13 回都市言語調査国際シンポジウム』、陝西師範大学(中国・西安市)にて、2015 年 8 月 10 日-14 日。

(3)包聯群、「少数言語の保護と継承について—モンゴル語と満洲語を事例として、そのモデル化の可能性を考える—」、第 4 回日中国際ワークショップ「現代中国における言語政策と言語継承 少数言語を中心に考える」、科研費基盤 B/C (代表包聯群) 主催、学習院大学(東京都豊島区) 口頭発表、2014 年 9 月 15 日。

(4)黄行・包聯群、Identification and Practical Situation of Endangered Languages in China, “Endangered Languages Networking - Values & Benefits for the Future”、Linguapax ASIA Symposium 学習院大学東洋文化研究所主催、学習院大学(東京都豊島区) 口頭発表、2014 年 9 月 13 日。

(5)包聯群、「中国黒龍江省におけるモンゴル人の言語と継承・復興」、Linguapax ASIA Symposium 「危機言語復興ネットワーク—その意義と今後の可能性—」、学習院大学東洋文化研究所主催、学習院大学(東京都豊島区)にて、ポスター発表。2014 年 9 月 13 日。

(6)包聯群、「言語景観からみられる言語の多様性」、包聯群、『第十二回都市言語研究国際シンポジウム』、南京大学・内蒙古大学主催。内蒙古大学蒙古学学院会議室(中国・フフホト市) 2014 年 9 月 2-4 日。

(7)包聯群、「コミュニケーションの中で新たに作られた言語—モンゴル語と中国語の接触を事例として」、『第 2 回アジア未来会議論文集』(AFC2014)。公益財団法人渥美国際交流財団(関口グローバル研究会) Presentation 奨獲得、2014 年 8 月。イナ・グランド・バリ・ビーチホテル、ウダナヤ大学(インドニシアのバリ島)。

(8)包聯群、「『老乞大』について」、日本中国語学会第63回全国大会、東京外国語大学(東京府中市) 2013年10月26日-27日。

(9)包聯群、「モンゴル語の書記伝統における標準規範の歴史」、科研費プロジェクト「書記伝統における標準規範の歴史的東西比較研究」(研究代表者原聖、平成25年-27年) 第一回研究会。学習院大学(東京都豊島区) 北2号館10階大会議室 2013年10月27日。

(10)包聯群、「言語景觀について—中国のモンゴル系地域とモンゴル国との比較」(落合守和教授と共同発表) 第6回ウランバートル日モ国際シンポジウム(モンゴルにおける鉱山開発の歴史と現状と課題) 関口グローバル研究会(SGRA)・モンゴル科学アカデミー歴史研究所主催、ウランバートル市(モンゴル国) 2013年9月6日-8日。

(11)包聯群、「言語シフトについて—黒龍江ドルブットモンゴル人コミュニティを事例として」、モンゴル諸語と地域文化研究 2013国際シンポジウム、中国内モンゴル民族大学主催 中国社会科学院共催、内モンゴル阿爾山市(中国) 2013年8月18日-21日。

(12)包聯群、「日中若者語対照研究と都市言語研究」、第一回アジア未来会議(渥美国際交流財団関口グローバル研究会) バンコク市(タイ) 2013年3月8-10日。

(13)包聯群、「中国内モンゴル科爾沁地域における社会言語学的研究及びその展望について」、科爾沁地域研究国際シンポジウム、内モンゴル民族大学主催、2012年3月25日、招聘講演、通遼市(中国)にて。

(14)包聯群、「コミュニケーションの中で生まれた混合言語—中国語とモンゴル語の接触」、『コミュニケーションの中で作られていく言葉—言語接触と文法化』国際ワークショップ、岡山大学人文科(岡山県岡山市)にて、招聘講演。2012年2月21日。

(15)包聯群、「中国黒龍江省におけるモンゴル人コミュニティの言語維持・復興への取り

組み」、主催 科研費プロジェクト「中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティの言語維持・保存や継承・復興への取り組み」(代表包聯群)および「言語政策史の国際比較に関する総合的研究」(代表 原聖) 共催 多言語社会研究会 東洋文化研究所班研究 「アジアにおける多言語状況と言語政策史の比較研究」。特別講演会「中国における言語政策と言語復興」、東洋文化研究所(東京都文京区) 2012年2月5日。

(16)包聯群、「日本の言語サービス」、中国言語サービス高級フォーラムにて招聘講演、中国広州大学(広州市) 2012年1月6-9日。

(17)包聯群、「言語教育、言語使用と言語変異—中国黒龍江省のモンゴル人を事例として」、University of Massachusetts 言語文化学院(アメリカ、アマースト市)招待講演、2011年10月13日。

〔図書〕(計4件)

(1)包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第3巻、2016年、三元社(予定)。

(2)包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第2巻、2015年、三元社、284頁。

(3)包聯群編著、『現代中国における言語政策と言語継承』第1巻、2013年、三元社、190頁。

(4)原聖、包聯群編著、『书写传统之标准规范的历史性东西方比较研究』(中国語版、科研報告書)。2016年3月。女子美術大学発行。三元社(製作)、179頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

包 聯 群 (BAO Lianqun)

大分大学 経済学部経済学研究科 准教授

研究者番号：40455861

(2) 連携研究者

原 聖 (HARA Kiyoshi)

女子美術大学芸術学部 教授

研究者番号：20180995

(3)研究協力者： 黄 行 (HUANG Xing)

徐 大明 (XU Daming)